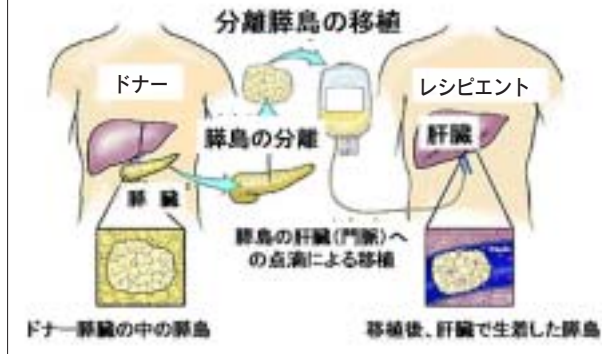


膵島移植

膵臓より内分泌組織である膵島のみを分離し、インスリン依存型糖尿病患者(IDDM、Type I)に移植することで、糖代謝の改善を達成する治療。



糖尿病は、膵臓内のランゲルハンス島(以下、膵島)にあるインスリンを分泌する細胞が自己免疫により障害を受け、インスリンの分泌機能が完全になくなる1型と、いわゆる

生活習慣病に起因する2型に大きく分けることができます。中でも1型糖尿病は、血糖コントロールが難しく、糖尿病性腎症、糖尿病性網膜症を併発し、患者さま本人

のみならず家族への負担も大きな疾患です。1型糖尿病に対する根治療法として、阪大病院では脳死または心停止下での膵臓(腎臓)移植の施設認定をいち早く受け、2000年

糖尿病根治目指し 膵島移植の施設認定

このほど、心停止下膵臓同時移植に成功しました。これまで9例の患者さんに対し膵(腎)移植(1例の生体膵・腎移植を含む)を行い、社会復帰を可能にするなど良好な成績を残しています。

このほど、心停止下膵臓より膵島のみ分離し、門脈内に点滴移植する新しい糖尿病根治療法、「膵島移植」(図参照)の実施設として、新たに認定を受け、

中之島ヘルスケアクラブ 第1次会員を募集

大阪大学医学部と歯学部各附属病院の現役医師に健康相談ができる中之島ヘルスケアクラブの第1次会員募集が10月2日から始まりました。

同クラブは大阪大学

また、会員のためのヘルスケアセミナーを開き、最新の健康情報をお伝えします。会員の資格は今のところ、大阪大学の関係者に限定しています。第1次会員の募集は350人。相談、セミナー合わせて5回受けることのできるブライペイドチケットが31500円、会員登録料が15000円です。問い合わせは06-6444-2140へ。

「痛み」に各科連携し対処

医学的な痛みは大きく分けて三つあります。腰痛や関節痛などの高齢者に多い痛み。がん病巣が原因となつて起こるがん性の痛み。最後に帯状疱疹による痛みのように、患者さまの生活の質を著しく低下させてしまう慢性的な痛みです。

痛みは血液検査や超音波などの検査ではとらえることはできません。どのような痛みで、どの程度の痛みなのか、患者さまの主観で、客観的な評価は難しいのが現実です。



各科から集まったカンファレンス「痛みについての勉強会」

2006年4月の診療報酬は、3.16%の引き下げという大幅なマイナス改定が実施されました。しかし、看護職員配置は12年ぶりに引き上げられ、手厚い看護をした際の入院基本料として、「7対1」の看護職員配置が新設されました。

「7対1」というのは、平均して入院患者さま7人に対し看護職員1人が実際に勤務していることを意味しています。この基準は一般病床全体で満たせばよいことになっており、実際には入院患者さまの重症度や看護必要度などにより病棟ごとに傾斜配置することになります。

「7対1」看護の実現に向けて

現在、阪大病院の入院基本料は「10対1」で、各勤務帯の平均看護職員数は、各病棟に掲示している通りです。しかし、高度先進医療、移植医療を実施する当院において、患者さま本位の安全で質の高い看護を提供するには、いうまでもなく人員が必要です。

すべての病棟で増員目指す

すべての病棟に看護職員を増員し、特定機能病院としての機能を維持するために、また、昼夜を問わずより安全で安心な医療が提供できるように、加えて看護の質向上に欠かせない看護職員の定着を促進する上でも「7対1」看護の取得は、現在、病院にとって大きな課題の一つです。

より手厚い看護のできる「7対1」とするために、180人の看護職員確保を目指しており、2007年4月実現に向けて、荻原病院長を中心に全職員一丸となって看護職員確保に全力で取り組んでいます。

疼痛医療センターが発足

医学的な痛みは大きく分けて三つあります。腰痛や関節痛などの高齢者に多い痛み。がん病巣が原因となつて起こるがん性の痛み。最後に帯状疱疹による痛みのように、患者さまの生活の質を著しく低下させてしまう慢性的な痛みです。

痛みは血液検査や超音波などの検査ではとらえることはできません。どのような痛みで、どの程度の痛みなのか、患者さまの主観で、客観的な評価は難しいのが現実です。

このように痛みについて、阪大病院では、患者さまの痛みをできるだけ抑えることができるように、診療科の枠を超えて総合的に診療、治療、研究を行う疼痛医療センターをスタートさせました。

基本的には患者さまが最初に受診された診療科が診断、治療を行っています。治療については、痛みの専門

分野である麻酔科をはじめ、他の診療科と連携することはあっても、総合的に診断、治療することはありませんでした。

原因が多岐にわたる、治療法も確立していない痛みは、一科だけで対応しているよりも、痛みの診断、治療

を行って他科と協力をすることによって、よりよい診療ができる可能性が高くなります。

また、痛みについてセミナーも開き、痛みに関して共通の認識を持つとともに、最新情報を交換して、各科の痛みに対する取り組みを活性化させていきます。真下節センター長は「将来的には痛みを総合的に診療、教育、研究できる日本の拠点にしていきたいと考えています」と、話しています。

免疫・アレルギー内科

関節リウマチの新薬治療

阪大病院の免疫・アレルギー内科は治すのが難しい膠原病や国民病ともなっているアレルギー疾患について診断、最新の治療を行っています。特に膠原病のなかでも患者さまの多い関節リウマチにつ

いては、阪大で開発された新薬の治療が最終段階に入っています。膠原病は体の外部から入ってきた異物を攻撃する免疫が自分の組織や臓器を攻撃してしまうことにより起こる病気。関節リウマチや全身性エリ

破壊したり、炎症を起こしたりする免疫関連物質が明らかになってきました。なかでも、TNF- α やIL-6は関節リウマチだけではなく、他の膠原病の発症と進行に関連していることもわかってきました。



ボードで囲いプライバシーに配慮した採血室

感染症に対しても監視の目を光らせています。臨床検査部では、最新の検査機器をそろえ、1年間に外来、入院合わせて400万件を超える全国でもトップクラスの検査を行っています。

感染症に対しても監視の目を光らせています。

MRSAなど耐性菌が院内にまん延すると、体力の弱った患者さまが感染して、重篤な状況に陥り、悪くすると生命に危険が及ぶなど大変なことになります。

臨床検査部では患者さまが耐性菌を持っておられないかどうかのチェックを行っています。また、手術場や病棟なども検査をしています。MRSAはもち

阪大医師は臨床研修医の良き伴走者



講習会」を開き、新たに26人の臨床研修指導医を誕生させ、これまでに合計で130人の指導医を養成することができました。26人の参加者には臨

床研修のカリキュラム・トレーニングを実際に体験してもらい教育の基本理論を習得、さらに阪大初期研修プログラムの問題点などについて熱いディスカッションが行われ、タスクフォース、参加者全員で有意義な時間を共有することができ、ワークショップの本来の目的である「個を越えたつながりの回復」を実践することができました。

臨床検査部

感染症に強力な監視の目

臨床検査部では、最新の検査機器をそろえ、1年間に外来、入院合わせて400万件を超える全国でもトップクラスの検査を行っています。

臨床検査部では患者さまが耐性菌を持っておられないかどうかのチェックを行っています。また、手術場や病棟なども検査をしています。MRSAはもち

ろん重要視されている8種類の耐性菌を迅速に判定できる検査体制を備えています。血液などの重要な材料から耐性菌が検出された場合には、どのように対処するかの説明も付けて主治医に迅速に知らせ感染の広がりを未然に防ぐようにしています。

また、医療従事者から患者さまへの病気の伝播を防ぐため病院ボランティアも含め職員全員の麻疹、風疹、水痘、ムンプス（おたふく）やB型肝炎などの抗体測定を行っています。さらに、採血室ではマスクと手袋を用いた標準予防策を早期より導入し、針刺し事故対策も、24時間体制で検査を行い、感染の防止に努めています。

このように、阪大病院の臨床検査部は医療の質と安全を確保する縁の下で力持ちなのです。

医師法の改正に伴って2004年から新医師臨床研修制度が開始されています。新卒医師の臨床研修は、内科、外科、小児科、産婦人科、精神科、麻酔科、救命救急部を基本必須科とする「スーパードクター方式」となりました。この研修シス

テムでは各診療科3か月という短い期間で研修医が到達目標を達成できるように指導する必要があります。研修医を指導する指導医の役割が非常に重要になってきています。阪大病院では今年9月に1泊2日で「第4回臨床研修指導医養成

看護学専攻学生がインターンシップ

インターンシップは、学生が自らの専攻、将来のキャリアに関連して一定期間の現地訓練を行う制度をいい、看護部では、医学部保健学科の看護学生を対象に初めて取り組みました。

インターンシップの意義を①当院の機能や看護師・助産師の役割を知ってもらう②学生を受け入れることにより職場の活性化や改善につなげる③学生の就業動機を理解することによって、採用計画に生かす、とし、今年7月31日～9月1日の間、1クール1週間のサイクルで放射線部、外来を除くすべての部署で受け入れました。

参加人数は26人（延べ29人）でした。経験豊富な看護師1人に1人の学生がつき、患者さまのご理解とご協力を得て看護ケアや診療補助に参加しました。

高校生が1日看護師体験

大阪府では、21世紀の高齢化社会を支えるため、助け合いの心を育み、看護の明るいイメージづくりを目的に、高校生の「一日看護師体験」が1991年から始まり、阪大病院では今年7月に初めて受け入れました。



大阪府立守口東高校より11人、大阪府立箕面高校より7人の計18人が参加しました。午前中、病棟で、清拭や足浴、洗髪、更衣介助、車椅子介助、血圧測定、検温、配膳、新生児だっこなどを、患者さまのご理解とご協力をいただき、指導看護師と一緒にを行いました。

シミュレーションルームを設置



安心、安全な医療の実践、優れた医療人の育成のために、研修医、看護師らの病院職員、医学部学生らが心肺蘇生などの医療手技が訓練できるシミュレーションルームが外来棟4階に設置されました。

シミュレーションルームは病室をそっくり再現し、実際の治療現場に居る感覚で訓練が行えるようになっています。ベッドには不整脈などの病態が再現できる人体そっくりのシミュレーターが設置されています。静脈、動脈注射の仕方、胸腔などから胸水などを抜く技術、心肺蘇生、気管挿管、除細動、看護に伴うさまざまな診察、ケア、処置などの訓練ができます。

待ち時間短縮に向け調査

患者さまからのご意見をもとに、各診療科外来における待ち時間について、予約時間及び受付時間からの待ち時間調査を、2005年2月、7月、9月と2006年6月に実施しました。その結果、予約時間及び受付時間から最短の待ち時間は17分で、一番長い待ち時間は2時間23分でした。

調査結果をもとに待ち時間の長い各診療科長が改善策を検討。企画推進室会議において対策を考え、待ち時間の短縮に向け努力していきます。

病院見学会を開催

阪大病院を広く市民の皆様にご覧いただくために、昨年度から病院見学会を実施しており、今年は9月29日に行いました。7人の参加があり、日ごろ目にされない病院の裏方の仕事や外部者の方には立ち入れないエリアの見学も行い、大学病院を身近に感じていただきました。



展示コーナーで癒しを



外来棟エントランスホールで、7月18日から2カ月間、アマチュア写真家でもある患者さまの橋田尚夫氏のご協力により、「癒しの写真展」を開催することが出来ました。見事な丹頂鶴の写真で、外来患者さまも待ち時間の合間にご覧になり、多くの貴重な御意見を寄せていただきました。10月は国立文楽劇場のご厚意により文楽パネル展を開催しております。

文書料の改定について

本院では、これまで種類別に文書料を定めていましたが、10月1日から本院所定の様式と所定外の様式の2種類の区分といたしました。つきましては、10月1日から文書料を次のように改めますのでお知らせします。

- 本院所定の様式のもの・・・2,100円
- 本院所定外の様式のもの・・・5,250円